

犬の心膜

北里大学獣医畜産学部獣医病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.334



症例はシェパード、雄、6才である。生前には著しい栄養障害と四肢の無痛性硬結性腫脹を伴っていた。又、レントゲン撮影により肺の腫瘍が疑われていた。剖検的には肺全域に亘る大小の腫瘍性結節が密発し、全身的な転移（腎、脾、大網、心膜、胸膜、皮下織）が観察された。腫瘍性病態は不規則に走行する線維性間質によって分画され、内部は髓様からコロイド状ないしセラチン状を呈していた。

組織学的所見：全身性に形成された腫瘍はその形態像から軟骨肉腫chondrosarcomaと診断された。又、四肢骨における著しい外骨膜性の異常造骨は肺性肥大性骨関節症Hypertrophic pulmonary osteoarthropathyに一致するものであった。尚、軟骨肉腫の原発巣は右側第3肋骨骨頭部と見做された。

提出の心膜組織には転移病巣としての軟骨肉腫性増殖が観察されるが(写真1)、出題の主眼は同時に認められるリンパ様組織からなる病態解釈である。リンパ様組織は、血管周囲性あるいは血管とは無関係にリンパ球、細網性細胞が多数観察され、所々に大小の腺様ないし嚢胞構造を伴っている(写真2)。それらの内側には立方状、円柱状及び絨毛円柱状の上皮性細胞が配列し、腔内にはPAS反応陽性物質を多量に容れており、上皮性細胞の分泌能がうかがわれる。細網性細胞は散在性あるいは集合性を示して分布し、後者のそれは時折小腺胞様配列を

示して、細網性細胞と腺胞ないし嚢胞様構造形成への密な関連性を示唆している。

以上の光顕的形態像は胸腺組織を想起させるものであるが、加えて若干の電顕的検索により細網性細胞は胸腺の上皮性細網細胞Epithelial reticular cellに類似性を求め得るものであった。しかるに今回の胸腺における腺性構築ないし嚢胞形成については、上皮性細網細胞の有する多能性multipotencyが重要な位置を占めるものと解された。

胸腺は発生学的に第3,第4鰓嚢pharyngeal pouchの内胚葉性上皮から生ずるとされ、その発育と退縮に関しては年令との密接な関係が知られている。しかし、退縮の形態像は動物種や原因により一様ではない様である。犬の胸腺退縮に際して上皮性嚢胞の出現が稀に知られているが、その原因や形態発生、意義に関しても論議の多いところである。今回の胸腺における多発性の嚢胞性変化について、その形態像より単なるaging involutionとは解し難い様に思われた。即ち、退縮過程における胸腺組織の一部、ことに上皮性細網細胞のある活性的表現とも解された。そしてそれは全身的な腫瘍性増殖ないしは慢性的疾患と何らかの関連性を有しているかもしれないことが考察された。

診断：犬の心膜における軟骨肉腫の転移と胸腺嚢胞形成。